

日本水彩畫會の規定を一讀した時すぐ入會がしたいと思つにが例の時も金も許さなかつた。

今度はいよゝゝ入會の機に接した。暇も不十分ながら忙しい仕事をさいて與へられた様になつた、まあどうやら望みの一端は達せられて嬉しい。

僕は今迄展覽會を観たところが七八度諸大家の作に接したと僅か二度しかない、いつも展覽會を観る度毎に僕の腦は深く強く刺激されて啻に神祕な感に打たれて呆然として仕舞ふのであつた。

あゝ、僕は何故にこんな下らぬとを長々と書いたのだらう？而し僕、目今の心情を斯くもクドクドと訴えたのであつて貴重な誌面を汚漬したは實に多罪、免し給へ！切實なる先輩の諸兄よ、希くば、初學なる僕をば、崇高な予一チューアなる趣味の途に導かれむことを！

(完)

## 春の一日

あき 華 洋

好く晴れた微かな風の吹く暖い日であつた。靜と讀書して居るのが惜しい様な氣がしたので、何か寫生をと三脚片手に友のT君を誘つた、何所もゝ一體に淡い霞が棚引いて快よい夢の様な色で塗られて居た。紅の花緑の麥、其所か一面に咲いて居る菜の花、何を見ても皆春らしかつた。

途々水繪の版畫や、石川先生の言はれるスケッチ畫法の事など色々話して歩いた。

美しい小鳥は白い花の梢にチ、と鳴いて居た、暖いポカ／＼し

た日に照されてウツトリ燃えたつやうな若草の道を辿つた。何時の間にか目的の所へ着いてゐた。そこは菅公様の御宮だつた。

深い／＼藍色の乳を含むだ空、枝の垂れた目も覺る計りの櫻、手洗所の汚れた白い青い下げ手拭、參詣の人々、それらの調和がいかに長閑な日永な感じを現して居た。早速イーゼルをひるげた。櫻の色が空よりも沈みさうになつて大變六ヶしかつた畫には大體の調子を忘れてはならいと思つた。眞面目に二時間餘り筆を運んだ。友の畫も出來上つた。それから亦枯葉の残つた松の木を寫した。

日足の大分傾いた頃ソツ／＼と吹く風に送られて歸つて來た。家々には燈火がつひて居た。

## 東京府勸業展覽會の水彩畫

T K 生

何といつても水彩畫は太平洋畫會のことだ。太平洋畫會には水彩畫會といふ團體の出品がある。東京府の展覽會は、白馬會の人が澤山出してゐるが、水彩は實に少ない、その少ない中で南先生と石川先生の作が目につく、他は實にくだらぬものばかり、その日につく兩先生の御作も、格別大したものではない。あゝ、早く太平洋畫會の展覽會が見たい、そして水彩畫の室に一日を暮したい。